扉の外から流れ込んでくるひやりとした空気に、この国の季節の移り変わりを感じてシュテルは目を細めた。
つい先日まで、外に出ただけで額に汗が浮かぶほどであったのに、不思議なものだと思う。
「ではいってくるぞ、シュテル」
ディアーチェも、今日は袖丈の長いシャツを着ている。たしかに、半袖では今日は少し肌寒いだろう。
「いってらっしゃい、ディアーチェ」
シュテルが手を振る。ディアーチェはうむ、とうなずいて扉を大きく開いた。
「ああ、良い天気だ」
差し込んでくる日の光を眩しそうに見上げ、ディアーチェが微笑む。
「ではな、シュテル」
「はい」
もう一度シュテルの方を振り返り、そのまま扉を閉めようとして、ディアーチェは手を止めた。
「……？　どうかしましたか、ディアーチェ」
じっと自分を見つめてくるディアーチェに、シュテルが首を傾げる。
「いや、シュテル、一人になってしまうが大丈夫か」
今日はディアーチェ以外にも、レヴィやユーリ、アミタとキリエの姉妹もみなそれぞれに予定があって外出していた。
博士は研究室にいるようだが、一度籠ると一日中出てこないこともざらなので数には入れていないのだろう。
「大丈夫ですよ、ディアーチェ。もう子供ではないのですから」
「いや、我もうぬも、まだ充分に子供であろう」
「私はともかく、王はもう立派な大人ですよ。年齢の問題ではありません」
「それは、我が老けているということか？」
「どう思われるかは我が王の意のままに」
「ふむ、褒められたと思っておこう」
にやり、と笑うディアーチェに、シュテルも微笑みを返す。
「ではな、シュテル」
「はい、いってらっしゃいませ、我が王」
ふわり、と一礼するシュテルを頼もしそうに眺めて、ディアーチェは扉を閉めた。
それを見届けて、さて、とシュテルも部屋に戻る。
今日は休日。家事の手伝いの類は一通り済ませてしまったので、これから夕方までは空き時間だ。
なにをして過ごそうか、とシュテルは部屋の中をぐるりと見回した。
学校の課題、は終わっている。室内の整理などしなけれ

ばならないほど散らかってもいないし、昼寝をするほど眠くもない。
デュエルにでも行こうか、とも思ったが、窓越しに見える一面の空の青に、室内で行うブレイブデュエルで時間をつぶすのは少しもったいない気がした。
「……どこかに出かけましょうか」
普段であれば、ユーリあたりに声をかけて一緒に散歩にでも行くところだが、あいにく今日は一人である。
それなら、とシュテルは本棚を見た。
高度な学術書から世界各地の民話・伝承まで、ありとあらゆる本が揃っている中から、シュテルはまだ読めていなかった文庫本を手に取った。
部屋着を脱いで、クローゼットから少し厚手のワンピースを取り出す。
鏡の前で軽く髪を整えて、シュテルは部屋を出た。
途中、博士に声をかけようか、とも思ったが、研究の邪魔をしても悪いだろう、とそのまま玄関へと向かう。
靴を履いて外に出る。先ほどディアーチェを見送ったときよりわずかに日は高くに昇っただろうか。
真夏のころにはまさに焼け付くかと思うほどの強烈な日差しだったが、いまはその暖かさが心地よい。
本当に、この国の季節は不思議だ、と思う。
自分たちのいた国にも季節はあったが、ここまで寒暖の差は激しくなかったし、湿度の変化もそれほど大きくはない。
キリエが、この時期は体調を崩しやすいから気をつけて、と言っていた理由もわかる気がした。
たしかに、これほどの急激な変動の下では、着るものの調整も難しい。風邪など引きやすいのも仕方がないというものだろう。
ディアーチェもとくにそのあたりを気にしていた。と言っても彼女の場合、自身のことではなくもっぱらシュテルやレヴィ、ユーリのことばかりではあったが。
とくにユーリは身体が弱いこともあり、自然とディアーチェはその体調には格段の注意を払うようになっていた。
ユーリに言わせると、ディアーチェは過保護すぎます、ということになるようなのだが、まあそれも仕方ない、とシュテルは思う。
元々、ディアーチェはユーリには甘いのだ。過保護になるのも当然というものだろう。
ユーリを気に掛けるディアーチェの姿を思い出して、シュテルの口元に笑みが浮かぶ。
それでこそ、尊敬する我が王であり。
王は、皆の王であり――
「このあたりにしましょうか」
通い慣れた馴染みの公園。その一角、空からの日差しと

海からの風が心地よい、シュテル自身もお気に入りのベンチに腰を下ろして、シュテルは、ふう、と一息ついた。
と、足元でなにか気配を感じて、シュテルが視線を落とす。
猫だった。薄いグレーの毛をしたやや小さめの猫が一匹、ひょい、と顔を上げてシュテルを見る。
「こんにちは。お邪魔しますよ」
シュテルが笑いかけると、猫はそれほど興味もなさげに一声小さく鳴いて、そのまま身体を丸めた。
どうぞご自由に、と言われたような気がして、シュテルはそれでは、と持ってきた文庫本を開く。
それは、日本の児童文学の作家が書いた、お姫様が不思議な動物たちと出会いながら旅をするファンタジーものの小説だった。
普段は童話などを書いている作者の長編作品ということに興味を引かれて買ったのだが、さていったいどんな物語になっているのだろうか。
そんなことを考えながら読み進めていくうちに、いつの間にかシュテルはその不思議な世界に没頭していた。
柔らかな文体とリズミカルな構成が、そのまま登場人物たちの生き生きとした描写に繋がっている。
主人公のお姫様が出会う奇妙で愉快な出来事、それがまるで自分で体験していることであるかのように、すとん、と心の中に落ちてくる。
その心地良さにとらわれ、シュテルの目と指が、物語の先を追い求めるかのように次々とページを進めていく。
どれだけの時間、集中していたのだろうか。
ほとんど休むこともなく、一気に最後までを読み終えてシュテルが顔をあげたときには、日はすでに中天を通り過ぎ、やや西に傾き始めていた。
いつの間に集まってきたのだろうか、シュテルの周囲には、いつものように猫たちが数匹寄り添っていて、昼寝を決め込んでいる。
「……すっかり、夢中になってしまいました」
まったく猫の相手をしてあげられなかったことを申し訳なく思いつつ、しかし良い本に出会えたことを感謝しながら、シュテルは、うん、と一つ背伸びをした。
軽く首を回しながら、辺りを見渡す。
そこで、シュテルはおや、と思った。
好天に恵まれた休日の午後。絶好の外出日和だと思うのだが、周囲には人影らしいものは見当たらない。
耳を澄ましてみても、聞こえるのは風のそよぐ音と波の音、それに時折小さくうなる猫の声だけだ。
まるで、世界に自分だけが取り残されたかのような静寂。
シュテルが、身の回りに視線を向ける。
集まってきている猫の数が、心なしか普段より少ない気

がした。
読書に集中している自分をつまらなく思ったのだろうか。
と、不意にシュテルの頭の中に、幼いころの記憶がフラッシュバックするかのように浮かびあがってきた。
一人、毎日のように部屋に閉じ籠もって本を読んでいた日々。
べつに人と会うのが苦手なわけでも、外に出るのが嫌いだったわけでもない。
ただただひたすら、本を読んでいるのがなにより楽しかった、ただそれだけのことだった。
両親も困っていたようだし、幼心に申し訳ないと思うこともあったのだが、それでも本の持つ魔力のようなものに抗うことができず、学校以外の時間の大半を読書に費やしていた、そんな記憶。
ただ、と思う。
一冊の本を読み終えて一息ついたとき、ふと部屋の中を見回して、その静寂を、怖い、と思ったことが何度かあった。
この世界で、自分は一人ぼっちになってしまったのではないかという恐怖。
一歩部屋を出れば家族がいる、それはわかっていたはずなのに。
そんな孤独感と戦いながら、それでも本の虫を止めることもできなかった自分を救ってくれたのがディアーチェだった。
我が子の行く末を心配した父か母がクローディア家に相談したのか、あるいはどこかから自分の話を聞きつけてきたのか、いまだその辺りの理由は定かではないが、とにかくディアーチェはいきなり部屋にやってくると、自分の手を掴んでほとんど引きずるようにして外に連れ出してくれた。
「我と来い、本などよりも、よほど生きた知識と経験が手に入る」
そう、この空の青さと広さも、ディアーチェが教えてくれたのだ。
彼女があのとき、自分を引きずり出してくれなければ、いまごろどうなっていたことか。
いまもきっと、薄明かりの部屋で、机に向かっていたかもしれない。
誰と話すこともなく。
誰と会うこともなく。
ただ一人で。
一瞬、背筋が凍り付くような感覚をおぼえて、シュテルは身を縮めた。
いまはあのときと違う。
ディアーチェがいて、レヴィがいて、ユーリがいて、ア

ミタ、キリエ、博士、それにブレイブデュエルを通じて知り合った多くの友人がいる。
あのときと違う――はずなのに。
この感覚は、あのときと同じ。
自分が、自分だけが周囲から切り離されてしまったような、あの――
「シュテル？」
不意に名前を呼ばれ、シュテルが顔を上げる。
「……アリサ」
そこに立っていた少女の姿に、シュテルが息をつく。
ハニーブロンドの長髪を海風になびかせ、碧い瞳はまるで日の光を反射する水面のようにきらきらと輝いている。
アリサ・バニングス。彼女もブレイブデュエルを通じて知り合った友人の一人だ。
同じ炎使いのストライカーとして話が合うことも多く、彼女の人なつっこい性格もあってか気付けばすっかりうち解けていて、その仲の良さは彼女のチームメイトであるなのはからもうらやましがられるほどだった。
「こんにちは、散歩？　それとも読書かしら」
アリサが笑いかける。その笑顔にシュテルはなぜか安堵を覚えながら、
「そうですね、その両方、といったところでしょうか」
と小さく微笑みながらうなずいた。
「そうなんだ、もしかしてお邪魔だった？」
「いえ、ちょうど読み終わったところでしたから。アリサはどうしたのですか？」
「あたしも、ちょっと散歩って感じかな。最初はデュエルしにいこうと思ってたんだけど、こうお天気が良いと、もったいない気がしちゃって」
「ああ、私も似たようなものですよ」
二人、同時に空を見上げる。
やや傾き始めたとはいえ、まだまだ日は高い空にあって、その光を惜しげもなく地上に注いでくれていた。
「そうなんだ、それなら」
アリサが、シュテルの前に手を差し出す。
「どうせだったら、一緒に散歩しない？　一人より、二人の方が絶対楽しいから」
そのアリサの姿に、ふ、とディアーチェの姿が重なる。
ああ、まただ、とシュテルは思った。
彼女と共にいると、たまに錯覚にとらわれることがある。
アリサとディアーチェ、外見的には似ても似つかないはずの二人が、なぜか自分の中で重なるのだ。
どこか、彼女には、ディアーチェに似たなにかがあるのだろうか。
だから、自分も惹かれるのだろうか。
このアリサという少女に。